

太宰治『人魚の海』論

——困難／希望としての「信」——

* 館 下 徹 志
Tetsushi TATESHITA

A study of Dazai Osamu's "Ningyo no Umi"

はじめに

『人魚の海——新釈諸国噺』（新潮）41・10 昭和19・10）は「此段、信ずる力の勝利を説く」と結ばれる敵討の物語である。松前藩主をはじめ「家中の重役」が列席する場である人物に冷罵され、それがもとで非業の死を遂げた「浦奉行」の仇を、その娘と「召使ひ」の女性が討つ。この典型的な仇討の題材を、太宰は井原西鶴『武道伝来記』（貞享四・一六八七年四月刊）巻二の第四話「命とらるゝ人魚の海」から借用した。『新釈諸国噺』（昭和20・1、生活社）の他の十一篇と同様、西鶴の表現を基に太宰独自の「うがち」によって変形した短編小説である。

今のところ、この「敵討」に関して原典が何らかの歴史的事実に拠っていたことを示す史料は見つかっていない。「諸国敵討」という副題のとおり、西鶴は北辺の蝦夷地を舞台に、「恥」を雪ぐことに命を賭け、その思いを遂げられなかった者に代わって仇敵を討つという仮構のなかで、武家の「義理」の見事さを描き上げていた。それは、「中古武道の忠義、諸国に高名の敵討、其の働き聞き伝へて」（「序文」）、「古今武士の鑑、刀は鞘に納め、御代長久、松の風静かなり」（巻八第四「行水で知る人の身の程」）と、全国津々浦々、徳川の世の安泰を言祝ぐことの一環としてあった。

『武道伝来記』に収められた三十二篇を通観するとき、十指に余る「衆道」が絡んだ物語の多さに気づく。好色物の浮世草子『男色大鑑』（貞享四・一六八七年一月刊）と武家物の第一作『武道伝来記』とのつながりは深い。「好色物は好きでない。そんなにいいものだとも思へない。着想が陳腐だとさへ思はれる」（『新釈諸国噺』「凡例」）と述べていた太宰ははたして、「衆道」という濃密な対的關係には翻案化への興味を示さなかったことになる。

"Faith (Shin)" as the Difficulty / Hope

「命とらるゝ人魚の海」には、その冒頭に人魚の登場という怪異譚が置かれる。読者を非日常的な世界へと誘い得る魅力的な書き出しである。しかしその設定は、武士の信義を称賛するための発端をなすに留まるのだった。人魚は半弓の矢に当たり、「其魚忽ち沈みける」とあつさり姿を消してゆく。太宰も人魚には執着せず、「木の葉の如く翻弄せられ」る船中の人々に目を向け、その醜態を戯画化する。怪異譚の魅力に依存することなく、人間の諸相を凝視しようとするのである。

この小説に関する研究はこれまで、寺西朋子による原典の探索¹⁾のあと、翻案の手法や「信」の評価、さらには結語の解釈をめぐって積み重ねられてきた。例えば、「信」の内実について藤原耕作は他の太宰作品とのつながりを問い、²⁾ 跡上史郎はその丁寧な腑分けを試みる。それらの論考を批判的に引き継ぐ木村小夜は、「一つの『勝利』において本質的に異なる信の結果が重ね合わされている」ことに着目し、登場人物たちが何に依拠して「信」と関わろうとしたのかを追究することで、そこに前時代と現代、原典と翻案との境界を画定する。³⁾ また、小泉浩一郎は主人公の造型を「ナルシズムの美学のもつ固有の矛盾を、太宰が意図的に顕在化」させたものだとし、⁴⁾ 山田有策は「西鶴本」との比較をとおして、場面ごとに太宰の独創性と限界を探る。⁵⁾

このように、『新釈諸国噺』のなかでも『人魚の海』の研究はとりわけ活況を呈している。本稿はそれらの先行研究に多くのことを学びつつ、意図とは関わりなく出来る「言の答」や小説内外の「信」を取り巻く言説の働きをたどり、その後さらに、戦時下において「信ずる力の勝利」という言葉が撒き散らすさまざまな効果について考えてみたい。

* 釧路高専一般教育科(国語)

人魚が出現する冒頭場面は『武道伝来記』の叙述を踏襲していた。西鶴が参照したらしい、『本朝年代記』(貞享元・一六八四年刊、内題は『新編分類本朝年代記』)が伝えるところとも符合するのはこのためである。『本朝年代記』にはこうある。「人魚 後深草院、宝治元年三月二十日、人魚死、津軽浦流寄。形如人、有腹四足、先代有之、兵乱起。因有天下御祈禱」。宝治元(一二四七)年三月二十日、津軽の海岸に人魚の死骸が漂着した。その姿はあたかも人のように、腹部には四本の足があった。過去にもこのようなことがあり、その後には戦乱が起こった。そこで大規模な御祈禱を執り行った。人魚のような奇怪な生物が目撃されるのは世が乱れる前兆である、と中世の為政者は恐れていたであろう。

鎌倉時代末期に成立したと考えられる歴史書『吾妻鏡』は、宝治元年のこの事蹟とそれへの反応を記した後、「大魚」に対する畏れを語る。

此事則、被尋古老之処、先規不快之由、申之。所謂、文治五年夏、有此魚。同秋、泰衡誅戮。建仁三年夏、又流来。同秋、田左金吾、有御事。建保元年四月、出現。同五月、義盛大軍、殆為世御大事、云云(卷三十八)。

鎌倉に幕府が開かれてから約六十年、この間に起こった数々の内乱には、その前触れとして「大魚」がきまって出現していたという。源義経・藤原泰衡の追討(文治五年)、比企氏の乱(建仁三年)、和田合戦(建暦三年・十二月改元建保元年)と、政権発足後うち続いた内紛を先例として、この後に起こる、三浦・千葉一族を滅亡へと導いた宝治合戦(宝治元年)の予兆を「大魚流寄」という怪異に見ているのである。

このように、人魚は「大魚」の一種であり、世の乱れの徴候として出現する怪魚と考えられていた。したがって、「命とらるゝ人魚の海」の舞台である松前藩の行く末には自ずから怪しからぬ暗雲が漂うことになる。もちろん、そもそも人魚の出現とその後の出来事とはそれぞれが単独の事象にほかならず、両者の間に因果関係を見ることに合理性はない。しかし、結果からいえば、人魚の存否をめぐる言い争いがもとで、藩士二名(『人魚の海』では三名)の命が失われるという凶事が起こるのである。見慣れぬ自然現象や生物の出現を報告

し、記録することとその後の日常に生じる異変を観察することとは一対の対象化として相互に補完し合う。

『人魚の海』の序盤に設定された時空間と出来事の特徴は、こうした文化的に共有されていた心性に照らして考えておく必要があるのではないか。すなわち、「浦奉行」中堂金内が松前沖で遭遇し射止めた人魚の一件を帰藩後語ること自体、藩にとつては泰平の陰りを暗示する不吉な報告と受け取られる恐れがあることになる。また、それが藩政の乱れを示唆する神託と解されたとすれば、金内の経験談は遠回しな上意批判となる可能性すらある。

それゆえ、「くつろぎ、よもやまの旅の土産話のついでに」語ったのだとしても、その話柄の選択は軽率の誹りを免れない。少なくとも金内には、人魚の出現という怪異を報告するにあたって、今後の推移への危惧の念を言い添える必要があった。復命を聞き取った「上役の野田武蔵」に他言を控えるよう求める深慮が欠けていたのである。そうした伝え方を怠ったという意味で、金内にも(言の咎)はあるといえよう。つまり、「殿をはじめ一座の者」の前で一方的にいわれのない恥をかかされた悲運の者、とばかりは言い切れぬところが残るのである。

二

金内と同様に、(言の咎)は野田武蔵にもあった。

武蔵かねて金内の実直の性格を熟知してあるゆゑ、その人魚の不思議をも疑はず素直に信じ、膝を打って、それは近頃めづらしい話、殊にそなたの沈着勇武、さつそくこの義を殿の御前に於いて御披露申し上げよう、と言ふと、金内は顔を赤らめ、いやいや、それほどの事でも、と言ひかけるのにかぶせて、さうではない、古来ためし無き大手柄、家中の若い者どものはげみにもなりません、と強く言ひ切つて、まごつく金内をせき立て、共に殿の御前にまかり出ると、折よく御前には家中の重役の面々も居合せ、野田武蔵は大いに勢ひ附いて、おのおの方も聞きなされ、世にめづらしき手柄話、と金内の旅の奇談を逐一語れば、

金内が語る人魚をめぐる逸話に「古来ためし無き大手柄」という新たな価値

を見出したのは野田武蔵であった。『武道伝来記』においては、「人魚射止めたる事」を聞いた「老中」（家老）たちが「何れも手を打つて、『是れは例少なき手柄なり。明朝御機嫌を見合はせ、此儀御披露申し上げん』と云ひ合はされし時」と記述される。藩主への「御披露」という提案はその場の自然な成り行きで「云ひ合はされ」たものだった。この局面ではまだ、「大横目野田武蔵」の発言はない。つまり『人魚の海』では、「人魚の不思議」の報告を最初に聞き取り、仇討の発端を作る人物として武蔵が新たに設定されたことになるのである。それは、原典とは違い、これから始まる悲劇と復讐劇の全編を通して、武蔵の有責性が確定したことを意味してもいた。

突然の災厄にもひるまず、冷静な対応で難破寸前の船を救った金内の働きに、武蔵は武士の在るべき姿を見る。その評価そのものに瑕疵はない。金内の日頃の言動からその「実直の性格」に信頼を寄せていたからこそ、人魚退治の一件を信じ、その「沈着勇武」に感動したのである。次いで武蔵は、あくまでも謙譲の姿勢を崩さない金内に代わって、それを武勇譚の枠組みに移し換えようとする。だから武蔵は当初、金内の「手柄話」の効果を（称賛）の一点においてのみ予想したのだろう。「家中」という武士集団がこぞって価値を認めるほかない特性を金内は体現している、と武蔵は信じていたからである。

そのため、〈称賛〉という承認の一範型を先取りするかのようになり、「金内の旅の奇談」は存分に劇化されたにちがいない。ところが間もなく、その効果は、聞き手の受け止め方によって異なることが判明する。「殿をはじめ一座の者、膝をすすめて耳を傾ける中」、青崎百右衛門だけは、「勢ひ附い」た武蔵の語りに半畳を入れるのである。この小説の悪役、冷淡な拗ね者として描かれる百右衛門の差し出口は、人魚の存在を疑う立場から発せられる。

武蔵の話をも半分も聞かぬうちに、ふふん、と笑ひ、なう玄齋、と末座に丸くかしまつてゐる茶坊主の玄齋に勝手に話掛け、

「そなたは、どう思ふか。こんな馬鹿らしい話を、わざわざ殿へ言上するなんて、ちと不謹慎だとは思はぬか。世に化物なし、不思議なし、猿の面は赤し、犬の足は四本にきまつてゐる。人魚だなんて、子供のお伽噺ではあるまいし、いいとしをしたお歴々が、額にはくれなゐの鶏冠も呆れるぢやないか。」と次第に傍若無人の高声になつて、

このあと毒を含んだ言葉が矢継ぎ早に繰り出される。「額にはくれなゐの鶏冠」の箇所では、武蔵の調子づいた語り口や身振りを大げさに真似ているのだろう。百右衛門の冷笑的な言動は相手の嫌がる勘所に過たず向けられていた。「落ち窪んだ小さい眼はいやらしく青く光つて、鼻は大きな鷲鼻、頬はこけて口はへの字型、さながら地獄の青鬼の如き風貌」と描写される百右衛門は、「何かにつけて家中の者たちにいや味を言」う、「一家中のきはれ者」であった。家老を務めていた父の「百之丞」の禄高をそのまま引き継いだうえ、親の七光りで「重役のひとり」に収まり、「育ちのよいのを鼻にかけて同輩をさげすむ」という無頼ぶりは、西鶴が「悪人なれば」と簡潔に断言した人格の問題を生しくも生き生きと表象する。横柄、没義道、酷薄といった敵役の条件を十分に満たし、挙措の全てが他に不快感を与えるという徹底した形象は、むしろ小気味よいほどである。

武蔵との言い争いの後も〈論より証拠〉とばかりに、「金内殿もお手柄ついでにその人魚とやらを、御前に御持参になればよかつたのに」と、百右衛門は挑発の手を休めない。その聞こえよがしの悪口雑言が金内を傷つけるのは、この場面における百右衛門の言動の全てが、金内の存在を知りながらも無きがごとくになされるからである。それは、アクセル・ホネットが〈承認〉から遠く離れる行為として叙述した、他者が「意図的に見られなかつたことを明確にする身振り、ないしは振る舞い方」という「行為遂行的な」「軽視」以外のなものでもない。言わば、「承認の忘却としての物象化」（ホネット）を見せつけ、百右衛門は楽しんでゐるのだ。

『人魚の海』の読者は、青崎百右衛門という典型的な「悪人」の形象に、この物語の読みの手がかりを得る。ここまで悪辣な登場人物には何らかの懲罰が待ち受けているはずだと確信し、期待する。そして、その末路を想像しながら、百右衛門の吐き出す毒にさいなまれる金内の悲劇に立ち会うことになるのである。もつとも、厳密には、そのような心持ちを抱くよう誘導され、善人を襲う悲劇とその恨みを晴らす懲悪の場面に立ち会わされる、と言ひ換えるべきなのだろう。小説の語り手は公平な観察者として振る舞うことを要求されてはいない。多くの場合、作品世界を偏りのある視線で切り取り、読者とその視線に誘い込む。こうして語り手の価値観や好悪の傾向は読者のそれらに隠然と働きか

け、時には支配してしまうのである。「悪人」の形象も、そうした働きかけや支配の結果生じた仮象と考えられる。

そこで、ここではあえて、百右衛門の言葉に〈一理〉を探ってみよう。例えれば、傍線部はどうだろうか。『武道伝来記』にも「世に化物無し、不思議無し。猿の面は赤し、犬には足が四本に限る」とあり、異同はほとんどない。まことに、相手を小馬鹿にした憎々しい物言いではある。しかしながら、谷脇理史が注解するように、この言葉の根底には「体験的合理主義」があり、「近世初期の儒学の影響下にある当時ではむしろ正当な主張」であったという見方を参照するとき、言説の効果は変化する。「子は怪力乱神を語らず」と『論語』述而篇に書かれる孔子の行動規範は、儒学の基本理念でもあった。「怪」は怪異、「神」は鬼神のことと解釈される¹⁵。超常的な出来事をめぐる言説には、この世の条理を揺さぶり、人を惑わす魔力がある。現実の直視を妨げる、その反理性的な言動を孔子は忌避したのだろう。人魚の話題も「怪」と「神」の範疇にある。百右衛門による揚げ足取りは、そのねらいはともかく、武家の慎みを説くという大義を持っていた。体面上ではあっても、「こんな馬鹿らしい話を、わざわざ殿へ言上する」ことの「不謹慎」を論難する百右衛門は、「重役のひとり」としての責務を果たしてもいるのである。

一方、野田武蔵の〈言の咎〉はまず、そのような混ぜ返しを常とする青崎百右衛門が列座する場で、金内への〈称賛〉を期待する「手柄話」をしたことにある。木村小夜が論じるように、「相いれぬ他者の存在を軽率にも想定し得ず、同質の人間ばかりがいるという前提で振舞った武蔵の迂闊さ¹⁶」が問題なのである。仮に、満座の〈称賛〉を当然のことと考えていたとすれば、武蔵の言表は純真ではあるが、あまりにも世知に疎く、無防備なものといわねばなるまい。懐疑的な態度を示し、集団的な〈承認〉の広がりにも異を唱えることが百右衛門の得意とする言動の型であることを武蔵が知らなかったはずはない。「手柄話」から導き出されると期待される価値が高ければ高いほど、百右衛門によるその引き下げの効果も増大する。冷笑的な反応を予測できず、不毛な言い争いにまで発展させてしまったのは武蔵の落ち度でもあった。加えて、金内の〈言の咎〉は武蔵にも重層的に覆いかかる。話題の意味するところを深く吟味せず、受け手の不規則な応答も予測することなく、ひたすら直情的に武家の鑑を「御披露申し上げ」てしまったのである。

武蔵が負う〈言の咎〉の第二は、その語り口の特質にある。「世に化物なし、不思議なし」と断言する百右衛門に対して、武蔵は文献に拠りながら〈宿讎〉、〈犢〉、〈鬼〉の順に「異風奇態の生類」が出現した例を語り、「そもそもこの日本国は神国なり」という信奉を土台にして、「日常の道理を越えたる不思議の真実、柄として存ず」ることを立証しようとする。『人魚の海』の語り手はその雄弁さを、「名調子でもつて一氣にまくし立てる」と捉えていた。『武道伝来記』の「分別貞にて申しければ」という揶揄を込めた言い回しに感応し、敷衍した表現である。弁論の見事さは必ずしも聞き手の共感を呼ぶとはかぎらない。流暢でそのない語りがかえって仇となり、聞き手の反感を買うこともある。「名調子」は決して万能の語り口ではないのである。武蔵がその点について無自覚だったとすれば、次のような言挙げの効果は常に、当人の思惑とは逆方向に作用するだろう。

武士には、信の一字が大事ですぞ。手にとつて見なければ信ぜられぬとは、さてさてあはれむべき御心魂。それ心に信無くば、この世に何の実体かあらん。手に取つて見れども信ぜずば、見ざるもひとしき仮寝の夢。実体の承認は信より発す。然して信は、心の情愛を根源とす。貴殿の御心底には一片の情愛なし、信義なし。見られよ、金内殿は貴殿の毒舌に遭ひ、先刻より身をふるはし、血涙をしばつて泣いてござるわ。金内殿は、貴殿と違つて、うそなど言ふ仁ではござらぬ。日頃の金内殿の実直を、貴殿はよもや知らぬとは申されませう。

『武道伝来記』には見られない詰問調の弁舌である。語調は歯切れよく、百右衛門の痛いところを突く迫力もある。とはいえ、その論理構造は杜撰というほかはなからう。「情愛」とのつながりは、〈義〉であろうが〈忠〉であろうが武家の徳目の全てとの間に指摘できる。よって、「信」とのみ結びつけても説得力はない。また、「手に取つて見れども信ぜずば、見ざるもひとしき仮寝の夢」は明らかに、百右衛門の要求とはすれ違う情緒的な勇み足といえる。「人魚はこの世に無いと言つてゐるのではござらぬ。見た事が無いと言つてゐるだけの事だ」というのが「体験的合理主義」者・百右衛門の立脚点であった。論理を二の次にして「信」や「実直」の価値をうたいあげる武蔵の分別立ては、

その意に反して単なる自己陶醉に墮してしまふのである。では、なぜ『人魚の海』の語り手はこうした逆効果の中で「信」を称賛させたのだろうか。小説の末尾に置かれた「信ずることの勝利」の問題とともに後半で論じてみたい。

三

『武道伝来記』の中堂金内は、青崎百右衛門から侮辱を受け、「聞き捨てには成り難く」、「討ち果さんと思」つたものの、このままでは「我れいよいよ胡乱なる事を申せしと、跡にて人の嘲弄も口惜し」と思いとどまり、誰に告げるでもなく「密かに屋敷を出で」、「彼の人魚の体を僉議」するための旅に出る。一方、太宰はここでも野田武蔵と金内との対話の場面を新たに設定した。人魚の存否をめぐる言い争いがもとで出来した〈恥〉の中身を詳述させ、金内の覚悟の深さを強調するかたわら、武蔵自身の罪の意識に焦点を当てるのである。

武蔵は、いぢらしさに、もらひ泣きして、

「武蔵が無用の出しやばりして、そなたの手柄を殿に披露したのが、わるかつた。わけもない人魚の論などはじめて、あたら男を死なせねばならぬ。ゆるせ金内、来世は武士に生れぬ事ぢやなう。」顔をそむけて立ち上り、「留守は心配ないぞ。」と強く言つて広間から退出した。

太宰による『武道伝来記』の差異化は、武蔵を熱情の人として描き、その役割をより鮮明にしたところに顕著な特徴がある。「無用の出しやばり」から金内の「留守」宅の家人に対する心遣い、敵討の助太刀、さらには、「殿のお許しも無く百右衛門を誅した大罪を詫び」ての切腹に至るまで、小説の要所に武蔵を直接関わらせ、責任を果たさせる。金内との今生の別れとなるこの場面で、武蔵は率直に自らの非を悔い、謝罪する。「来世は武士に生れぬ事ぢやなう」という吐露は自己にも向けられていたはずである。『武家義理物語』（貞享五・一六八八年二月刊）巻一の第五話「死なば同じ浪枕とや」に基づいて書かれた『義理』（文藝）12・5 昭和19・5）でも、「まことに武家の義理ほどかなしき物はなし」と、太宰は原典の「人間」を「武家」に置き換えてその苦衷を代弁していた。たしかに、一旦事があれば従容として「義理」に掬めとられることが「武家」の矜持を支えてもいたのだろう。だが、「わけもない人魚の

論」のためにわざわざその「義理」を発動させてしまった武蔵の罪は重い。先に論じた武蔵による第一の〈言の咎〉が対象化されることで、金内の悲運はより鮮明な輪郭を帯びる。

その金内の人物像もまた、〈うがち〉の副次的な効果で通俗化されていく。人魚搜索の費用を持ち出すために帰宅した金内は、「八重といふことし十六になる色白く目鼻立ち鮮やかな大柄な娘と、鞠といふ小柄で伶俐な二十一歳の召使ひ」という二人の家人に異変を悟られてしまう。

「お父さまは、へんね。」と八重は、父を送り出してから、鞠に言った。

「さやうでございます。」鞠は落ちついて同意した。金内は、ひとをあざむく事は、下手である。いくら陽気に笑つてみせても、だめなのである。十六の娘にも、また召使ひにも、看破されてゐる。

「お金を、たくさん持つて出たぢやないの。」お金の事まで看破されてゐる。

原典にはない会話と地の文の取り合わせが滑稽な味わいをもたらしている。「看破されてゐる」という批評的な語りの連用は、娘たちに全てを見透かされている金内の不器用さを軽妙に印象づける。家族から見た金内という視点を導入する〈うがち〉によって、『武道伝来記』からは伝わってこない生身の人間としての〈弱さ〉が前景化するのである。それはまた、金内の日頃の言動に注意を向け、その意思や真情を読み取るうとしてきた二人の女性の深い愛情を暗示してもいる。武家の者が守るべき理念に従つて即断し、過不足なく対応する『武道伝来記』の「十六に成りぬる娘」と「金内寝間の上げ下ろし」をしていた「二十一に成りし」「鞠と云へる者」の二人とは異なる親密な間柄が、通俗化の別の効果として浮かび上がる。

金内の〈弱さ〉は、「鮭川の入海のほとり」で「村の漁師」たちに人魚捜しへの協力を呼びかける場面でも際立っていた。「所持の金子を残らず与へ」、浦奉行という「役目を以て」ではなく、「二身上の大事、内々の折入つての頼み」であることを明かした後、「それから少し口ごもり、頬を赤らめ、ほろ苦く笑つて、そちたちは或ひは信じないかも知れぬが、と気弱く前置き」するのである。この要らぬ付度の表明は結果的に、「漁師の古老たちは深く信じて同情し、若い衆たちは、人魚だなんて本当かなあと疑」うという分断を招くことになる。

「獵師あまたに金銀を取らせ、俄かに大網おほみを引かせけるに」とだけ書かれる原典から離れて、「寒風に吹きさらされて、網を打つたりもぐつたり、さまざま難儀して捜査し」ても現れない成果にいらだち、不平の声を漏らす者が続出するという事態に金内はさらされる。しまいには、「木訥の口調で懸命になぐさめ」てくれる「老爺のいたはりの言葉」にも「あきらめ」を取する「ひがみ心さへ起つて来て」、とうとう金内は孤立する。

次第に心魂朦朧として怪しくなり、自分は本当に人魚を見たのかしら、射とめたなんて嘘だらう、夢ぢやないか、と無人の白皚々の磯に立つてひとり高笑ひしてみたり、ああ、あの時、自分も船の相客たちと同様にたわいなく気を失ひ、人魚の姿を見なければよかつた、なまなかに気魂が強くて、この世の不思議を眼前に見てしまったからこんな難儀に遭ふのだ、

自他への信憑に疑念が生じ、記憶すら信じられない心身の耗弱状態にある。

《信》の価値は相対化され、《信義》の根底は崩れる。その思考も頹廢的となり、「勇あり胆あり、しかも生れつき実直の中年」として登場した中堂金内は別人になりはてるのだ。この場面における太宰の筆致は執拗で、逃げ場のない金内は、『ヨブ記』を彷彿とさせる理不尽なまでの責め苦に耐えなければならなかつた。「不思議な美しいもの」を見てしまった罰として「こんな地獄に落ちるのだ」とやけになる金内は、「前世から、何か気味悪い宿業のやうなものがあつたのかも知れない」と運命を呪いはじめる。「父の後を追つて発足した」八重と鞠の到着を待つことなく、「入海の岸ちかくに漂つてゐたといふ」亡骸の「頭には海藻が一ぱいへばりついて、かの金内が見たといふ人魚の姿に似てゐた」。この容赦ない皮肉を込めた最期の描き方は、『武道伝来記』の「入日を西の方かたと伏し拝み、惜しや命掛け浪の泡あわの如くに消えぬ」という極楽浄土への旅立ちを修辭的にほのめかすそれとは対照的である。百右衛門が見せていた《茶化し》を代行するかのようなその描写こそ、善なる者の悲惨な最期を刻みつけることで《敵討》の動機や正当性を明確にするための仕掛けであつた。

四

《敵討》という復讐劇はひとたび始動すると完結に向けて突き進むほかない

不可逆性をその特徴とする。復讐の正当性を保証する集団の中で、仇敵を追う者はその心性を共有する集団に追われる者となる。仇敵だけではなく、討手となつた者も集団の倫理に追い詰められ、《義理》の体現を迫られるのである。そこには言うまでもなく《情》の介在はあるものの、論理や理知の入り込む余地はない。原因を成した発端がどれほど些細で偶然性の高い出来事であつたとしても、この復讐劇に招き寄せられた当事者とその縁ある者たちは、《情》絡みの《義理》に搦めとられた運命を甘受することでは、生き、死ぬことはできない。そこで、第三者として傍観する者は、その行方定められた物語を後押しする陰の関与者となる。

平出鏗ひらいで二郎『敵討』（明治42・8 文昌閣17）に記されたその実態は、近世において、とりわけその中期以降は身分を越えて実践されたこの《義理》が、いかに鞏固な規範となり得ていたかを如実に物語る。「忠臣孝子たるものの行として称賛し、為政者も善行として褒め、世間一般も悉く褒めたたへた」敵討は、艱難辛苦の末の完遂という魅力的な物語性を駆動力として、《義理》の再確認という美談へと容易に仕立て上げられる。ともに《情》を揺さぶる劇となる恰好の対象ではあつたが、公には《心中》が負の《義理立て》を表象していたとするならば、それに対して《敵討》は公認の《義理責め》として賞翫されていたのである。これらの表裏をなす集団的の心性は近世の《意気地》、気概の重要な一面だつたのだろう。¹⁸

ここで、『人魚の海』に設定された時代には公認の私刑としてあつた《敵討》の特徴を、『武道伝来記』との比較をとおして考えてみよう。平出鏗二郎は前掲書で《敵討》の慣例として四項目を挙げ、その筆頭に「敵討をなすには公許を得ざるべからず」という規範を提示していた。江戸では町奉行、京都では所司代、その他の「地方では領主または地頭に願ひ出」て予め許可を得なければならぬ。『武道伝来記』には「武蔵、道中を守護し、御前ごぜんを宜しく申し成し」とあることから、藩主への願ひ出は武蔵が事前に済ませていたと読むことができる。かたや『人魚の海』では、金内の死が確認された日の夜に、「殿の御許しも無く」決行に及ぶ。直情的な武蔵の独断で、「これからすぐ馬で城下に引返し、百右衛門の屋敷に躍り込み、首級を挙げて、金内殿にお見せしないと武士の娘とは言はせぬぞ」と、八重を仇討へと駆り立てたのである。主君に宛て事後報告の書状を認めた武蔵は、「この責すべてわれに在りと書き結」び、「何

のためらふところも無く見事に割腹して相果てた」。この引責自害も『人魚の海』の新たな趣向であった。

また、助太刀の記述においても両作品には違いがある。『武道伝来記』が武蔵の「手前に扶養ほくみ置きし増田治平と云へる浪人に後見頼うしろみ」んだのに対して、『人魚の海』では「増田治平」を登場させず、武蔵自身が百右衛門の屋敷に乗り込み助太刀を務める。このように、全編にわたる野田武蔵の積極的な関与は、『人魚の海』に見られる、『武道伝来記』との最も歴然とした示差的特徴である。無論、その関与の大きさが武蔵の切腹に必然性を与える。

青崎百右衛門が討たれる場所も、「遊山ゆざんの帰るさ」(『武道伝来記』)、屋敷の「奥の座敷」(『人魚の海』)と異なる。だが、それ以上に手の込んだ補筆が見られるのは、その最期の描写であった。原典では「増田治平」に「右の手を討ち落」とされた後、「左にて抜き合はず」のが精一杯だった百右衛門が、『人魚の海』では異様なほどしぶとく抗戦する。

その夜、武蔵を先登に女ふたり長刀ながなたを持ち、百右衛門の屋敷に駆け込み、奥の座敷でお妾を相手に酒を飲んでゐる百右衛門の瘦せた右腕を武蔵まづ切り落とし、百右衛門すこしもひるまず左手で抜き合はずを鞠は踏み込んで両足を拂へば百右衛門立膝になつてもさらに弱るところなく、八重をめがけて烈しく切りつけ、武蔵ひやりとして左の肩に切り込めば、百右衛門たまらず仰向けに倒れたが、一向に死なず、蛇の如く身をくねらせて手裏剣を鋭く八重に投げつけ、八重はひよいと身をかがめて危く避けたが、そのあまりの執念深さに、思はず武蔵と顔を見合せたほどであった。

凄惨な最期だが、何よりも百右衛門の「執念深さ」に目を奪われる描写が続く。山田有策はこの「化物じみた存在感」の所以を、太宰が「人魚の妖美さを描こうとし」てそれを「断念し」たことの代補であるとす。たしかに、「人魚」には物語の発端以外に活躍の場は与えられなかった。百右衛門の醜怪さはそのことと隠微に照応するのだろう。反撃の対象が八重に集中するのは、彼女に「懸想して、うるさく縁組を申し入れ」たものの断られた恨みによるものと読める。人魚の存否をめぐる百右衛門の悪態も、「かなはぬ恋の仕返し」、結局は金内への意趣返しだったということになる。執心に囚われる者がその果てに

蛇体へと姿を変える物語は、『道成寺縁起』(室町時代末期成立)や上田秋成『雨月物語』(安永五・一七七六年刊)の「蛇性の姪」²⁰ だけではなく、近世の怪談集にも多く採られている。「蛇の如く身をくねらせて」攻撃を続けた百右衛門も命の終わりに邪淫の化身となり、愛執の凄まじさを見せつけるのである。美談としての〈敵討〉はしばしば重疊的な果報に彩られる。八重には重役の「末子」の「人縁仰せつけられ」て中堂の名跡は存続し、鞠もある「美男の若侍」との縁組みがまとまる。さらに吉事は続き、「それより百日ほど過ぎて、北浦春日明神の磯」から、人魚らしき「不思議の骨格」が見つかったという急報が届く。検分の後、「その奇態の骨の肩先にまぎれもなく、中堂金内の誉れの矢の根」が発見され、ついに武士の一分を取り戻すのである。かくて、「八重の家にはその名の如く春が重つたといふ、此段、信ずる力の勝利を説く」と、この小説はめでたく終幕を迎える。

五

さて、前章までの考察をふまえて、「此段、信ずる力の勝利を説く」という結語の内実を掘り下げてみたい。「信ずる」こととはまず、ある事象が実在することを認め、そのことを前提にして振る舞うことを指すのだろう。「信ずる」ことのもう一つの重要な意味をなす神仏への帰依という信仰に関わる心性も、そのような信憑を基礎とする。小泉浩一郎は「信ずる力」の意味内容を「人間における高貴性・非日常性・反俗性等々の存在を信ずる力の謂である」と読み解く。²¹ 超越的な倫理への信頼をそこに見るのである。

では、そもそも、この小説で「信ずる力の勝利」を実証したのは誰なのだろうか。中堂金内が語る人魚退治の話を素直に信じ、命を賭して〈敵討〉を支えた野田武蔵か。それとも、「弓矢八幡、誓言する」と武家らしく八幡神に祈りを捧げ、〈信義〉を貫いた金内か。はたまた、金内の死の真相について説く武蔵を信頼して、父への〈孝〉、主人への〈忠〉を体現した八重と鞠なのか。

もちろん、その全員を指すという見方もあるだろう。皮肉屋の懷疑主義者・青崎百右衛門に〈不信〉を表象させたうえで、それと対峙する人々に邪悪な存在を滅ぼさせるという二項対立の〈勸善懲悪〉譚としてこの小説が読めるならば、その解釈は正しい。武士たちの〈義理〉に寄り添い、事態の推移を簡潔に綴る『武道伝来記』の叙述は、そうした〈勸善懲悪〉の図式からの逸脱を回避

している。だが、『人魚の海』の「信」は〈不信〉と真向かうところにはなかった。「金内の屍に頭を垂れ」た武蔵が発した言葉に注目してみよう。

えい、つまらない事になった。ようし、かうなつたら、人魚の論もくそも無い。武蔵は怒った。本当に怒った。怒った時の武蔵には理窟も何もないのだ。道理にはづれてみようが何であらうが、そんな事はかまはない。人魚なんて問題ぢやない。そんなものはあつたつて無くたつて同じ事だ。いまはただ憎い奴を一刀両断に切り捨てるまでだ。

「人魚」の存否をめぐる論議や物証発見の必要性、「理窟」や「道理」という大義を支えるはずの論理的な筋道の全てを否定して、「憎い奴を一刀両断に切り捨てる」ことだけが目的化している。当然のことながら、怒りは「一刀両断」の真つ当な理由にはならない。このような偏執的ともいえる感情の暴走と義侠や武勇との間には越えがたい隔たりがある。太宰による大幅な加筆によって形作られた『人魚の海』の野田武蔵は時に、心の赴くまま「名調子」に乗せて陶然と自説を述べ立てたかと思えば、合理性を無視して血気にはやる、激情型の煽動家を演じることがある。武蔵のいう「信」が百右衛門の〈不信〉と噛み合わないのはこのためである。〈妄信〉に近い「信」を振りかざす、その突発的な見境のなさは、かえつて「信ずる力」の価値を引き下げてしまふだろう。

金内にとっての「信」はどうだろうか。先に確かめたように、苦難の直中にあつたとはいえ、漁師たちが抱くであろう人魚の存在への疑念を付度し、「木訥の口調で」、「蝦夷の海には昔から、こんな化物みたいなさかなが、いろいろあつただ」と語る「漁師の古老」の慰めにもその底意をいぶかり、自分自身の体験も夢だったのではないかと疑うという、「信」とはかけ離れた惑乱に金内は襲われていた。武神・八幡神に手を合わせながらも、臨終間近には、「どうやら死神にとりつかれた様子で」、「あたら勇士も、しどろもどろ、既に正気を失ひ」と、信心も薄れるありさまであつた。〈信あれば徳あり〉という古諺どおり、「亡き後にて侍の名を揚げ」(『武道伝来記』)ることはできたが、そこに至るまでの過程で、〈うがち〉による通俗化によつて、むしろ「信ずる力」の減退や限界が露わになつてしまつたのである。

それに対して、八重、鞠という次世代の女性たちは一貫して「信」に生きた

といえよう。八重は、「あけくれ神仏に祈つて、父の無事を願」い、それもかなわず金内の死に際会すると、武運の尽き果てたことを悟り父の後を追おうとする。また、八重とともに殉死を遂げるつもりだつた鞠は、武蔵から事の顛末を聞き、一転、主人の恩に報じようと躊躇することなく〈敵討〉に加わる。木村小夜は「人魚の実在」という「根拠とは無関係に己の確信のみに従う言わば〈非合理〉な信」の「勝利」をそこに見る。二人の事態に対する構えの特異性を明らかにした卓見である。『人魚の海』は、中堂金内、青崎百右衛門、野田武蔵というそれぞれに「信」から逸脱するところがあつた武士たちの死を契機として次世代に向けて「信」の果報を譲り送る物語だつた。金内の「誉れ」は「中堂」家の「信」の家名となつて、八重たちの世代に受け継がれるのである。こうして、「信ずる力の勝利」はさまざまな逸脱のあわいに辛うじて表象されていたといえるだろう。しかし、ひとたびこの小説が発表された時代に「信ずる力の勝利」という言葉を投げ返してみると、作品内におけるそれとは別の意味が見えてくるのではないか。

信じるより他は無いと思ふ。私は、馬鹿正直に信じる。ロマンチズムに拠つて、夢の力に拠つて、難関を突破しようと思つてゐる時、よせ、よせ、帯がほどけてゐるぢやないか等と人の悪い忠告は、言ふもので無い。信頼して、ついで行くのが一等正しい。運命を共にするのだ。一家庭に於いても、また友と友との間に於いても、同じ事が言へると思ふ。

信じる能力の無い国民は、敗北すると思ふ。だまつて信じて、だまつて生活をすすめて行くのが一等正しい。人の事をとやかく言ふよりは、自分のていたらくに就いて考へてみるがよい。私は、この機会に、なほ深く自分を調べてみたいと思つてゐる。絶好の機会だ。

不平を言ふな。だまつて信じて、ついで行け。オアシスありと、人の言ふ。ロマンを信じ給へ。「共栄」を支持せよ。信ずべき道、他に無し。²³

昭和十五(一九四〇)年十一月に発表されたこの評論で、太宰は「信じる」ことへの賛辞を繰り返す。同年七月に発足した第二次近衛文麿内閣は、日本が

主導する東アジア圏域の在るべき姿を構想しなおし、それまでの（大）東亜新秩序」に替えて（大東亜共栄圏」という用語を国内外に公表して、使いはじめていた。中国大陸での泥沼化した戦闘が長期に及ぶなか、太宰が書いた「ロマンチズム」、「夢」、「難関」、「運命」、「絶好の機会」、「共栄」という縁語的な連なりには、同時代への真率な応答が込められている。

そのなかに頻出する「信じる」ことへの言及は、「難関を突破」する「道」をその一点に絞り、それに賭ける覚悟を説くことが目的だった。「信じる能力の無い国民は敗北すると思ふ」という一文の論法は、「信ずる力の勝利」のそれと通底する。「馬鹿正直に」、「だまつて信じて、ついで行く」「能力」だけが、勝利する「国民」に求められるものだ、というのである。烈しい語調の合間に置かれた、「よせ、よせ、帯がほどけてゐるぢやないか」、「オアシスありと、人の言ふ」などの先行する文芸の（もどき）と考えられる（あそび）をどう評価するかは難しいが、「信じるより他は無い」時局に当事者として向き合う決意について、その存否を深読みする必要はないだろう。

おわりに

『人魚の海』が発表されたのと同時期の、昭和十九（一九四四）年十月六日に閣議決定された「決戦輿論指導方針要綱」には、「現在迄の戦局は遺憾ながら我に優利とは言ひ難い」という分析が明記されていた。その分析を承けて、「最後の勝利は必ず我方にあるといふ確信を具体的事実に基いてはつきり掴ましめねばならぬ」と、「指導方針」が述べられる。

社会各界の指導者層は自ら深く反省し大衆をして必勝の信念に疑惑を生ぜしめるが如きことは日常の言動に於ても深く戒心するとともに軍官民等の一致団結を阻害する事象の発生を見た場合は急速にこれを排除する。²⁴

「必勝の信念」はまさに最後の砦であった。その「信ずる」心に「疑惑を生じせしめぬ」ことが「最後の勝利」の条件だという（精神主義）以外に「物量に事欠かぬ米英」に対抗すべきものがなかったからである。²⁵ 同要綱には、「米英人の残忍性を実例を挙げて示し、殊に今次戦争に於ける彼等の暴虐なる行為を暴露して敵愾心の激成を図るべきである」という文言も見える。いかなる場

合でも、戦う動機を維持させるうえで「敵愾心の激成」は一定の効果を上げる。戦況が悪化の一途をたどるなか、「四四年後半頃からは、『鬼畜米英』というスローガンが新聞に登場するようになる」。²⁶ こうして、『人魚の海』における変形された（勸善懲悪）の図式や「暴虐なる行為」に対する（敵討）の適時性が確かめられる。

したがって、「信ずる力の勝利」という表現は、劣勢を実感せざるを得ない（大東亜戦争）の現状を知りつつも、あえて「必勝の信念」の力に「最後の勝利」を託す覚悟を投影してもいた、と考えられよう。だが、「信ずる力」の言挙げは副作用として、もはやそれ以外にはすべがないという悲壮な響きを醸成する。「いまはただ憎い奴を一刀両断に切り捨てるまでだ」と「敵愾心」をむき出しにする武蔵の激情や、「夢や迷信をまことしやかに言ひ伝へ、世をまどはすのは、この実直者に限る」と吐き捨てた百右衛門のあてつけは、（大本営）内部を含む戦時体制の核心に触れてしまっていたのである。

とはいえ、『人魚の海』は特定の時代のありようを婉曲に照らし出すだけの単なる寓意小説ではない。たとえ太宰の創作意図がそこになかったとしても、また枠組みとしては（敵討）という話型を崩さなかったとしても、幾重にも重ねられた（うがち）の末に、西鶴が固守した（勸善懲悪）を相対化する小説として生成したのである。常に非合理性と隣り合わせにある野田武蔵の情動的な言動や自他への「信」から遠ざかり錯乱に陥る中堂金内の最期は、（善）なる特性の固有価値に亀裂を生じさせる。（悪）を表象する青崎百右衛門にも、底意はともかく、道理に従うという（一理）を認めることができる。観念的な対立関係ではなく、掘り下げてみれば露呈するそれぞれの内実を描くことで、（勸善懲悪）の構造は小説の内部から変質する。『人魚の海』の随所に見られる滑稽な味わいは、そうした変形により立ち現れる。

「信ずる」ことは、ある種の賭けといえよう。「信じて敗北する事に於いて、悔いは無い。むしろ、永遠の勝利だ」²⁷と、太宰は述べる。武蔵のように、力みかえって「信」の實在的な価値を強調しても、逆に「信」への（不信）を誘引する。「信」の要諦は「馬鹿正直」に「だまつて」信じることにあるのかもしれない。『人魚の海』はそのような「信ずる力の勝利」に賭けて「悔い」ることがないという到達し難い境地への希望を灯す小説なのである。

- 1 太宰治『新釈諸国噺』の本文は『太宰治全集』7 (平成10・10 筑摩書房) に、「かすかな声」の本文は『太宰治全集』11 (平成11・3 筑摩書房) による。原則として、他の引用文も含め、仮名遣いおよびルビは原文のままとし、漢字は新字に統一した。文中の傍線は引用者による。
- 2 『武道伝来記』の本文は、『西鶴全集』第七 (与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編纂校訂 昭和2・12 日本古典全集刊行会) による。
- 3 〈うがち〉の手法について水野稔は「人間社会の隠された裏面・様相もしくは欠陥と見なされるもの」を「指摘・剔出することと説く(『黄表紙・洒落本の世界』昭和51・12 岩波新書)。拙稿「太宰治『裸川』論——〈うがち〉で開かれる／閉じられる物語——」(『釧路工業高等専門学校紀要』平成25・12) 参照
- 4 寺西朋子「太宰治『新釈諸国噺』出典考」(『近代文学試論』11 昭和48・6)
- 5 藤原耕作「人魚の海」より太宰文学における「信賴」に及ぶ」(『太宰府国文』16 平成9・3)
- 6 跡上史郎「太宰治「人魚の海」の方法」(文学・思想懇話会編『近代の夢と知性——文学・思想の昭和一〇年前後(1925～1945)』平成12・10 翰林書房)
- 7 木村小夜「人魚の海」(『太宰治 翻案作品論』平成13・2 和泉書院)
- 8 小泉浩一郎「人魚の海」論二つの自画像」(『太宰治研究』12 平成16・6 和泉書院)
- 9 山田有策「太宰は西鶴に勝利したか? 「人魚の海」と「命とらるる人魚の海」(『太宰治研究』22 平成26・6 和泉書院)
- 10 『武道伝来記』補注(横山重・前田金五郎校注 昭和42・4 岩波文庫)
- 11 『北条九代記』(延宝三・一六七五年刊) 巻第八も、先行する歴史書が記すところをふまえ、宝治元年三月の異変の際、「古老の衆」が「先蹤」を挙げつつ、「御慎あるべし」と、時の執権・北条時頼に進言したとする。
- 12 アクセル・ホネット「見えないこと——「承認」の道徳的エピステモロジー」(『見えないこと 相互主体性理論の諸段階について』宮本真也・日暮雅夫・水上英徳訳 平成27・5 法政大学出版社)
- 13 アクセル・ホネット『物象化 承認論からのアプローチ』(辰巳伸知・宮本真也訳 平成23・6 法政大学出版社)
- 14 『武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』(新日本古典文学大系77 谷脇理史・富士昭雄・井上俊幸校注 平成1・4 岩波書店)
- 15 吉川幸次郎『論語』上(中国古典選3 昭和53・2 朝日新聞社) 注7に同じ。
- 16 注7に同じ。
- 17 本文は、平出鏗二郎『敵討』(覆刻版 昭和50・6 歳月社) による。
- 18 明治六(一八七三)年二月七日に発布された太政官布告によって、「復讐」は禁じられることになる。「私憤ヲ以テ大禁ヲ破リ私義ヲ以テ公権ヲ犯ス者」は「固 擅殺ノ罪ヲ免レス」というのが明治新政府の見解であった。「大禁」とはここでは殺人を意味する。こうして〈敵討〉は、「公権」による法の裁きを蔑ろにする「擅殺」、自己本位の殺人と見なされることになる。
- 19 注9に同じ。
- 20 「愛執深き僧、蛇と成る事」(義雲義歩編『片仮名本・因果物語』寛文元・一六六一年刊)、「遠江の国堀越と云ふ人、婦に執心せし事」(編著者未詳『諸国百物語』延宝五・一六七七年刊) などはその一例である。
- 21 注8に同じ。
- 22 注7に同じ。
- 23 「かすかな声」(『帝国大学新聞』833 昭和15・11・25 原題は「独語いつ時」)
- 24 「決戦輿論指導方針要綱」(情報局第二部放送課「大東亜戦争放送指針彙報」40 昭和19・10 内川芳美編『現代史資料41 マス・メディア統制2』昭和50・10 みすず書房 所収)
- 25 当時の精神主義的論調の具体例は枚挙に遑がない。「戦争の勝負は微妙な処できまるのである。その微妙なところは勇氣があるなしできまるのである」(武者小路実篤「一刀両断の時は今 一億撃敵心に武者振ふ」『週刊朝日』46・2 昭和19・7・9)、「われわれ国民めいめいには自分自身にも気のつかない神性と能力とが賦与されてあることを私は信じて疑はない」(高村光太郎「全国民の気合」神性と全能力を發揮せよ」『週刊朝日』46・3 昭和19・7・16)といった文学者による発言はこの時代の思潮を代弁している。
- 26 吉田裕『アジア・太平洋戦争』(日本近現代史⑥ 平成19・8 岩波新書) 注23に同じ。